

あるスケッチ風景

根岸 義明

初めて個展をすることになった。福井県立美術館の一階のギャラリーである。根岸義明展女性を描いたパステル画、七月二十七日〜三十一日。ギャラリーといっても、他の会場への通路である。展示スペースは二十二点。ただし、壁面は白の大理石、おまけに自然光。ここならパステル画が映えるだろう。(今年はこの期間、こししか空いていないとのこと。「残り物に福有り」とはこのことか。)とにかく旗揚げしてみよう。二か月あれば、今より高いレベルの追加作品もできるだろう。面倒なことは一切省いてスタートだ。……始まりはこうだった。

作品のレベルを上げるといふこと。これが難しい。大学を出てから多少油絵をしていたにしても、パステル歴は二年。別に芸大美大とは関係ない。まして何とか会というグループも知らない。だから、先生、先生とお伺いをた

てる必要もない。大作を作って、何々展に出すつもりもない。描きたいから描く。二十年、名画座メトロ劇場を経営してきた自分の目と良心を信じるよりしかたがない。

もつともメトロのおかげで、芸術家の友人は多い。わけても和田邦男氏は、絵心とは、芸術とは何かを教えられた。一度は、それまでの小品群三十枚をゴミと断定された。自分を描かないもの、人まね、単なるイラスト、単なる写実はご法度なのである。

それでも集中して描けば何とかなるもの。いつの間にか作品はたまっていたのだ。

スケッチしていると時々聞かれる。「男は描かないんですか?」私は答える。「スケッチはすぐできても、男を何か月もかかって『君は美しい』なんて言って描く気はおきませんからね」。

週一回の山本いけばな教室でのスケッチ。火・水・木・金・休みと一巡りするのにか月。このインターバルがスケッチする私に、ひじょうに新鮮な感動を与える。夕方五時から九時ま

で休みなく続く。花を活ける女。花。……美しい。この子は何といたっけ。多くても月一回だと名前をしよっちゅう忘れる。いや、前のことを忘れるからいいのだ。

ひとり二十分ほどで活け終わってしまふ。その間に美しさを見出し、急いでスケッチしなくてはいいけない。ひとり一枚か二枚。

ときに花の精がいたずらをする(これは池坊 山本須美子先生のことば)。つまり時々、花がきらきら光るのだ。その時、女性の目が輝く。そして美しい線が浮かび上がってくる。こんな時はさしずめ、フローラとミュージズがいっしょにお出ましというわけだ。そんな時にかぎって活けている子が、みんな一度にパッと美しくなる。「こんどこそは」なんて思ってたかやしい思いをする。

美しいいけばなの作品をつくらうとしていた女の子は、とくに美しい線、手、顔をするのである。おまけに次々と表情が変わる。実はたいへんなことなのである。

反対に体調の悪い時などは、Where

are you? (サウンド・オブ・ミュージック)のセリフ)無理にスケッチすると、描きたくない線をいつの間にか描いている。おまけにスケッチしようとするそつぽを向かれてしまうし、なかなか許してもらえない。用心、用心。でも「これは前の時のスケッチのプレゼントです。」と言って手渡す時の、相手のうれしそうな顔。これがまた楽しみなのだ。(デジタル中間調コピー、サイン付きを渡している。)

おそらく美の女神は残酷なかもしれない。話しかける時、間さえ与えない。ただひたすら命令する。「描きなさい!」おまけに、いいかげんに描いたスケッチは作品に対して言う。「これはだめです、捨てなさい!」

個展はあわただしく、しかも疲労を残して終わった。しかし、どうやらまた耳元で「描きなさい!」との声は続いているようだ。だいいち、いけばなをしている子の絵ができればいいのだ。……続く……続く

